

1. 第1回の議論関係

- (1) ターゲットスキル
- (2) 放課後等デイサービスにSSTを行う意義・必要性

2. アセスメント

- (1) 具体的な手法
- (2) ツール
- (3) アセスメントを踏まえた指導目標の設定の在り方
- (4) 課題や留意点

3. 支援の評価

- (1) 評価のタイミング
- (2) 評価の方法
- (3) 課題や留意点

4. 関係機関との連携

- (1) 連携が必要な機関と連携方法
- (2) 連携が必要なタイミング
- (3) 課題や留意点

5. SST実施に当たってのその他留意点

6. その他自由意見

1 (1) 第1回の議論関係 (ターゲットスキル)

- ◆ 2種類のスキル (①発達段階ごとに設定するスキル②全ての発達段階で共通して身に付けるべき、重要かつ基礎的なスキル) があることをガイドラインで示すのがよい。

分類	説明
発達段階ごとに設定するスキル	<ul style="list-style-type: none">・小学生、中学生、高校生の段階ごとに必要となるスキル。・小学校→中学校→高校への接続も念頭に置く。・発達段階ごとにどういったスキルを身に付けるべきかを系統的に示す。
全ての発達段階で共通するスキル	<ul style="list-style-type: none">・全ての発達段階で共通して身に付けるべき、重要かつ基礎的なスキル (例：自己紹介、あいさつ、感謝、謝罪、話の聞き方、話し方、発表する、自分の気持ちの伝え方など)・小学生の時に学んで終わりとするのではなく、中・高校生の時にも何度か学習する機会を設けるのが望ましい。

- ◆ ソーシャルスキルは、下記のような種類がある。放課後等デイサービスでのSSTの在り方を検討する本会では、主に「対人関係」と「社会生活能力」を対象とするのがよい。

分類	説明
対人関係	コミュニケーション、自己理解・行動調整、他者理解など
社会生活能力	地域リソースの利用、買い物や交通機関の利用など
生活能力	自己管理、金銭管理など

1 (2) 第1回の議論関係 (放課後等デイサービスにSSTを行う意義・必要性)

御意見	事務局の考え
<p>放デイには様々な障害の子供たちが通所しており、その中で、普通学級と特別支援学級の子供のみをSSTの検討対象とするのはなぜか。</p>	<p>どんな障害を持っている児童であっても、必要に応じてSSTを実施するのが望ましいと考えています。 ただし、SSTの支援の在り方を検討する上では、対象が広すぎると議論の収集がつかなくなってしまうため、便宜上の措置として、検討対象を「6歳から18歳で、通常学級又は特別支援学級に通っている発達障害の児童」と絞ることとしました。</p>
<p>子供1人1人に個別対応する放デイではSSTは実施可能かと思われるが、集団で仲間作りや遊び、生活を中心に考えて活動している放デイでは、SSTの対象児を選定するのが難しい。</p>	<ul style="list-style-type: none">・集団でSSTを実施する方法もあります。・個別にSSTを実施する場合でも、その児童にSSTが必要か、本人が望んでいるか、SSTの実施体制が整っているかなどの点を勘案して、SSTの対象児を選定することになるかと思えます。
<p>放デイにSSTが必要とする意義は何か。</p>	<ul style="list-style-type: none">・事業者側のニーズとしては「障害児の自立・成長に向けて必要な取組だと思う」「事業所の職員が普段の指導やケアを振り返るきっかけになる」といった意見がありました。(令和3年度SST実態調査)・事務局としても、全ての放デイでSSTが不可欠とは考えていませんが、子供の自立・成長のための方法の1つとしてSSTは有効だと考えております。

2 (1) アセスメント (具体的な手法)

① 観察法

- ・日常生活で過ごしている時の自然な状態を観察する。ただし、観察は単に見ることではなく、たとえば、応用行動分析のきっかけ、行動、結果と対応のように観察する視点が設定されていると望ましい。
- ・他の方法として、模擬場面を設定し、ロールプレイをさせてみて、その時の様子を観察する。例えば、「こんな時どうする？」と問いかけて、子供が演じてみる。
- ・どちらの方法もソーシャルスキルをチェックするシートがあると、客観性や評定者間のバラツキを押さえることができる。

② 自己評定

- ・ソーシャルスキルの評定用紙に、対象者自身で自分のソーシャルスキルを振り返って記入する。主観に基づく評定。メタ認知能力を獲得していることが条件となる。他者評定とすりあわせることが望ましい。
- ・自己申告法もある。「○ができない」「○をできるようにになりたい」といった本人からソーシャルスキルを身につけたいという申告。

③ 他者評定

- (1) 教師、指導員、家族、医師など大人が子供をチェックシートを用いて評定する。例えば、上記の資料に基づき、大人が対象児についてチェックする。
- (2) 仲間評定：クラス、集団の仲間同士でチェックする。

④ ICTを活用する

- ・これは今後の可能性として記す。バーチャル場面で、どう振る舞うのかを体験する。カラオケのように点数がでる。たとえば、相手に顔を向けていたら1点、相手に聞こえる大きさの声で言えたら1点といった形。次はどこを直したら良いか教えてくれる。例えば、ありがとうという時に、ニッコリ笑って言ってみようなど。

⑤ 面接法

- ・教師、指導員、医師など大人が子供と面接をして、その子のソーシャルスキルを評定する。アセスメントするための枠組みを決めておくことが望ましい。発達障害の種類や程度に応じて、丁寧に聞き取ることができる。

⑥ 教師、保護者、指導員などからのヒアリング

- ・学校や家庭での様子を詳しく知っている大人から聞き取る。毎日、子供を見ているので、様々な情報を持っていることが強みである。他方、大人の期待や不安などが混入して、実際の姿を過大、過小評価する恐れがある。

2 (2) アセスメント (ツール)

- ◆ 既存のアセスメントツールを活用する。
 - ・ サービス利用計画を策定する際に用いているアセスメントシート
 - ・ アセスメントに基づいた個別支援計画
- ◆ 同じツール（評価指標やチェックシート）を使っても、アセスメントを行う人によって、結果が異なるのは望ましくないため、誰が使っても差が出にくいものがよい。
- ◆ 専門職の配置がない支援機関もあるため、どんな職種であっても扱えるわかりやすいフォーマットがよい。
- ◆ 主観的なデータと客観的（科学的）なデータの両方が得られるのが望ましい。

2 (3) アセスメントを踏まえた指導目標の設定の在り方

- ◆ アセスメントによって複数の支援のポイントが上がってくると思われるが、その中から必要な点を本人が主体的に考えて選んでいくことが重要。
- ◆ 対象者本人の要求、必要性和指導目標が一致していることが重要であり、支援者側の押し付けにならないようにする。
- ◆ 既存の個別支援計画を活用する場合、その中に指導目標は盛り込まれているため、その目標達成のために、必要な場合にS S Tを実施する流れが作れるとよい。
- ◆ 目標設定は、児童発達支援の個別支援計画と同様に、長期（1年）と短期（半年）の期間を設定し、それぞれ項目目標と支援内容を記すのがよい。

2 (4) アセスメント (課題や留意点)

- ◆ アセスメントに当たっては、主観に頼らないようにする。
- ◆ そもそも放課後デイサービス事業で検査を行う体制はないと思われるため、既存のアセスメント結果 (サービス利用計画、個別支援計画など) をそのまま使用する手段もある。
- ◆ 対象者に関わるスタッフが話し合ったり、保護者と話すなどして、多面的に子供をみることで、思い込みや見過ごしを防ぐことが重要
- ◆ コミュニケーションスキルのアセスメントでは、以下の点を注視する。
 - ① 対象者が自発的に発信したのか、応答として発信したかどうか？
 - ② 会話はできるが、機能的には使えているか？
- ◆ ガイドラインでは、ある程度アセスメントに関する基礎理解を深められる内容を示し、どんな職種でも扱えるような、基本的なアセスメント手法を提示するのがよい。また、客観性が担保できる仕組み (複数の目線でアセスメントを行うなど) を示せばよい。

3 (1) 支援の評価（評価のタイミング）

- ◆ 評価のタイミングを大別すると以下の2種類だが、研究によってまちまちである。

分類	手法	目的
プレ-ポスト （前後比較）	SST実施の直前と直後に行う。 （例：1週間前と1週間後）	スキルの <u>獲得</u> を評定すること。
フォローアップ	スキルを一定期間チャレンジしてみて、 1か月後、半年後に再び評定する。	スキルの <u>定着度</u> を測定すること。 般化測定

- ◆ 個別支援計画の作成・更新のタイミングで、計画にある指導目標の評価と見直しを保護者と共有しながら実施する。
（支援計画とは別にSSTの評価を行うのは、放デイにとって負担感が高い。）
（支援機関で実施する個別支援計画であれば、概ね半年に1回程度の見直しが必要）
- ◆ 支援開始時、中間評価、終了時評価（1年後） （児童発達支援に合わせる）

3 (2) 支援の評価 (評価の方法)

- ◆ 評価の方法は、「2 (1) アセスメント (具体的な手法)」と同様である。なお、アセスメントと同様、標準化された手法はないと思われる。
- ◆ アセスメントと評価は、一体で行う。
- ◆ S S Tの実施担当者を含めて、サービス管理責任者が評価するのが望ましい。
- ◆ サービス提供者会議のような形で、事業者が、保護者と学校を交えた評価の場を持つようにするとよい。
- ◆ 目標スキルが実際にできたかどうか、また、できなかった場合はどういう点が難しかったかを記録する。
- ◆ 評価の際に、会議録のような記録を残しておくとうい。

3 (3) 支援の評価（課題や留意点）

- ◆ つい周りが対象者に目標スキルの実施を促してしまいがちなので、本人が本当に自発的に発信したか、又は示した手立て（ヒント）を活かして発信することができたかどうかを確認することが重要
- ◆ アセスメント、評価は大切だが、現場では、アセスメント、SST実施、評価まで全て行うことを負担に感じてしまい、SSTへの意欲を下げってしまう恐れがある。
- ◆ 1種類の評価方法だけでは限界があり、例えば、忘れ物が少なくなったという好ましい変化は、質問紙では見えづらく、インタビューなどで見えてくる可能性がある。
- ◆ 本人への聞き取りにより評価を行う際、評価の回数が多いと、施設側だけでなく、子供の負担にもなるので注意が必要
- ◆ 評価のタイミング、手法まで個別支援計画に含めることができるとよい。
- ◆ 各事業所がバラバラと評価するよりは、共通した評価基準、項目、観点を示せばよい。
- ◆ 主観と客観のバランスが大切である。
- ◆ 評価のタイミングは、現場の実情を考慮する必要もある。
ガイドラインでは、例として、いくつかのパターンがあることを示せば、現場は安心すると思われる。

4 (1) 関係機関との連携（連携が必要な機関と連携方法）

- ◆ 子供が最も多くの時間を過ごすのは家庭と学校であるため、放デイ・学校・家庭の3者の連携は欠かせない。連携ができていなければ、アセスメント・効果測定の実行は難しい。
- ◆ 学校・放デイと異なる環境下で、子供が同じ課題を持っている場合は、対処法が同一である方が子供にとってよいため、学校と放デイとの連携が重要である。
- ◆ 連携の基本は、朝や帰りなどに親と指導員が直接話すことだと思われる。加えて、メール、お手紙を通じて、連絡を取り合うことも有効である。
- ◆ 実際の本人の困り感や、それぞれの機関での評価内容などを情報共有できればよい。
- ◆ 連携の際の通信の手段にも注意が必要。電話などは、言った言わないの問題になることもあり得る。

4 (2) 関係機関との連携（連携が必要なタイミング）

- ◆ 新年度開始、新学期開始時期が最も必要。
学校の担任やクラス替えがあるなど、子供が新たな環境になじむまでは不安定なので、連携してサポートするのがよい。
- ◆ 保護者が気になることがあるときも、タイミングを逃さずに話を聞く。
何事も初期対応が大切で、初期対応を間違えると、こじれることがある。
- ◆ 放デイでのS S T開始時
- ◆ 子供自身が困っているとき。
- ◆ 放課後等デイサービスを利用し始めるとき。
- ◆ 在籍学校との連携では、年度の初め、中間、（年度末）、支援計画の作成時
- ◆ 放デイを利用する保護者としては、年1回でもよいので、子供の様子をまとめたレポート（問題行動、改善したことなど）があると嬉しい。

4 (3) 関係機関との連携（課題や留意点）

- ◆ 社会性を考える上では、主たる所属先の学校でスキルが発揮できたかという点が最終目標とも言える。
- ◆ 放デイと学校の連携があればいいと思うが、両者がコミュニケーションとる事はほとんどないと思われる。情報共有するにしても、保護者を介するのでもうまく伝わらない場合もある。
- ◆ 学校との連携は必須であると思うが、SSTを円滑に進めるためには、両者の連携方法やSST実施における役割分担について検討する必要がある。
- ◆ 保護者によっては、相談支援事業者が作成する「障害児支援利用計画」を学校の担任に見せる場合もある。
- ◆ 各現場での良さが異なるため、学校、医療、放デイ、療育、家庭で統一した対応は難しいと思われる。ただし、子供の生活全般をまるごと捉える必要はある。
- ◆ 放デイの場合は、子供の利用時間の長短や職員の体制、職員の専門性などによっては、連携をとることが困難な場合も多いと思われる。ただし、ガイドラインでは、どの程度連携をとるのが望ましいのかの指標を示すことが必要。

5. SST実施に当たってのその他留意点

- ◆ 中学生以上であっても、本人に自身の思考や認知の特性などを説明した際に、
「ほかの人が自分と同じだと思っていた」という人が多い。
表面的な行動のノウハウを教えるよりも、まず、ほかの人がこういう時にどう思って、どう行動をとるかを教える必要があるのではないか。
- ◆ SST実施に当たって、対象者に表面的な説明をするのではなく、なぜそのトレーニングが必要かを対象者に納得させなければ、トレーニングの内容が定着しないと思われる。
また、対象者への動機付けが重要
- ◆ 支援内容、実施方法、評価（効果）についても、本人の意見を反映させられる仕組みを作る。
- ◆ サービス利用計画の中にSSTを含めて週間サービス表を作る必要がある。

6. その他自由意見

- ◆ 放デイにおける支援の現状は、質の格差が非常に大きい。
ガイドラインによって支援の質の最低基準を引き上げることを考えるのであれば、以下の点が必要
 - ・ 内容はあまり細かくせずに、しかし一定水準を保てる内容になること。
 - ・ 具体的な支援方法につながるマニュアルがあること。
- ◆ S S Tの実施前には、以下の取り組みが必要
 - ・ 放デイという場所を、しっかり子供たちを受け止め、寄り添う場にする事。
 - ・ まずは子供が自分自身をしっかり大事にされる環境で、やりたいことがしっかりでき、人に興味関心をもてるようになること。